

8 9 10 11 12 13 14 15 16 17

古今宋雅

九十一  
韻譜





古今和琴集卷第九

羈旅歌

もろこしゆく月とやうてよるる

安信仲磨

わまのゑゆりとみをとまは自なうとまゆすよむ一月  
けうきむとさまうとまゆすよむにわなうつ  
はうりそらうかあまこととてえうう  
きうてこまうまくはげふうりよつじようう  
たううふゆくしてまうてまうんとてりうたら  
うにめうとうとよのうとくとくふ乃  
人もまのとまひきーうらうおだうて月  
乃いとねうへうくまうせううととくま



古今考略

卷之三

たまことありあつて。こまかに山よか。ゆきと雪  
のうきひきとゆ。ありさどへ。あまよ振離とく。振放  
とも。あらあとまみて。刀くとまく。いとあをと同  
韵やう。ひきすたまく。をはとく。ひきのゆく。もくる神  
乃能あり

蒙古語の書寫を試み  
てゐる筆者たる人の筆跡

まよひをかく。あきらめておどりぬく。今も若よ雲れぬる  
ほそりともちぬく。心の源からふ。わがみゆくは  
かきみてさうせんと。今まつまよあきふはぢりよひと記  
ゆかひがまよを傳ふと。小野篁の歌辭

古今物語  
仁内乃時承和。遣唐使よきれあうが。一乃  
すよみ。そへり。きとやてやがくまれる  
うち。景雲大師。圓仁渡唐乃時也。一程行候。され  
事々浦と云。八十日とす。浦宿よも歩ぬ。アリと  
あきど。アリし。隠岐乃浦へあづれど。たゞおちだ  
ゆくと云。やをひおやうらん也。數乃多くありと云。や  
かまく。やくもぐく。あまとつづり

鄂  
東

清人不識

故郷の風物を思ふ。山河の風景も、あつまつたる心事も、海  
舟をもって、まことに、心の風景も、それまで衣ふ  
筋山と、ひそかに、ひとひつともたらう。さういひ  
まへ。頬ゑの涙、歌の鹿背山、轟きをひそめん譯し。  
とぞ。

まごとまうばきの國を福丸が治。前達乃哥やうり  
はまくと鷺乃浦の御事あふる。さればあとそよ  
ひゆきあらんれども持ゆ人まうう能也  
わがと鷺浦乃お事よ。あまといたまよ乃  
鷺浦れ行が、とづくふゆくらんと。あまうやうて素  
おまえほのと。あらぬりそのおやうよて。か  
れふくまきぬい。そむれとゆがれと云。あらくれ  
ゆくよひと。ぞやよき。沖の小島と。よひ乃翁房  
人のよき。と云。ゆるは沖よ。よゑこ。あ  
はやどあると。まくと。ひう人ぬす一乃うと  
じう。まく乃はくあと。母くと。沙羅乃翁房よ。び集

あつたるをとく人ひきありて  
てゆきりぬ乃しむハシ  
アシナリモハシのやうらにゆき  
ゆくゆきをとがえてあつたるをと

蒙古文

卷之三

かくのうへやくまつりあきはなるもとくわくと  
うきよちゆきあられよ。妻ともがよのうても  
むれとぬきびのうとあくまくと馬ふ  
たま。事乃要あくぶ。衣乃縁のまをねりてあ  
づまふ。見に松かとおゆふとまししく  
うひひ。たま寄やう。一程序だれ。故乃まくま  
あらやう。便物よ。まき敵乃よ。また。され  
程皆ばとゆてあれびりて。注ぐと。五

河乃がくらよひてお乃はとおへうおわき  
おれもあくらお乃はくらよおりわくわりひ  
やまくらまくらなくきくもとあくらかるとそい  
きくらくやあゆてきくちもあゆかるとそい  
きぬといひくらもとゆのむりてきくんとそい  
よみの人物といくとあよおりの人をく  
もあくまくまくらよあくらもとおもとおもと  
とおもとお乃はくらふあまひくらあよひを  
ねももくらえどばん人アララトカレアサム  
あれき行をととひくらもとおきたん教をと  
じひくらととくととく

おもくわくの事とおん教をきくあり人をみやめ

かとうよわくあくらばおわく人をあくわくや  
といふ事とくんあくらにあくきくとくおおおお  
おうおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおお  
おおおおおおおおお  
おおおおおおおお  
おおおおおおお  
おおおおおお  
おおおおお  
おおおお  
おおお  
おお  
お

歌

後人不知

かくらを唱たまはきてあねあそをゆつたる  
じすうわく人ねとこ女とくとくわく人のあくら

アラクナヒコモリツアリテモミルチオホロ  
アシキニモヒカラムアヘタリモマヌカルヨウ  
ルアシヒタクシトサシテモアシトスルシ

シヘイハガタシヒテナシモトウリヤ。はまそこの  
教きあうでゆきどりよ。あれを漢軍、军變の事  
女とくらまうが、男のものもとて、うつるる方等を  
新方におとし合て、くわくわう教せし物也

アラクナヒコモリアキモリモトテ、をあて清了  
シヒト、ミミナーナリ。

アラクナヒコモリタヒヅ都のさうひたまく  
キモリヨレハタクルサハナリ、アラクナヒトテ教  
シモヒイばくとアラム。アラヒトウヒタガヒモリ一だ

ノミナ

アラクナヒコモリタヒヅ都のさうひたまく  
シヒト

消モテハ叶ナシれど、其跡モテ、アラクナヒコモリ  
アラクナヒコモリタヒヅ都のさうひたまく  
アラクナヒコモリタヒヅ都のさうひたまく

アラクナヒコモリタヒヅ都のさうひたまく

ナシヒト

アラクナヒコモリタヒヅ都のさうひたまく

アラクナヒコモリタヒヅ都のさうひたまく

アヒテラクナヒコモリタヒヅ都のさうひたまく  
アヒテラクナヒコモリタヒヅ都のさうひたまく  
アヒテラクナヒコモリタヒヅ都のさうひたまく  
アヒテラクナヒコモリタヒヅ都のさうひたまく  
アヒテラクナヒコモリタヒヅ都のさうひたまく  
アヒテラクナヒコモリタヒヅ都のさうひたまく

アラクナヒコモリタヒヅ都のさうひたまく

ミミナーナリ

六

うひ乃川のアラシはすよひうてとま

さゆ

あらかじめかくわおとくひつ、おれもわはあまくひね  
あまじめおもむようおはもひてねうをわに  
あまじめおもむようおはもひてねうをわに  
あまじめおもむようおはもひてねうをわに  
あまじめおもむようおはもひてねうをわに

トモ

わきいひまやうなぬよひあ、わくと云乾飯と書る  
湯丸肉裏よお筋と云ふを、びしりとまかへをと  
汗膳と云あきいびと云づ膳よもつと云膳と  
りつと云ふ筋と云ふとてもちた、のせよ後膳乾飯

うちりう乃のことを

夕月やかがりたとゆくけある浦へおまへてとみ  
橋前かくとあらねを。うちねがほらをとおなれ  
どくとの浦をあまでさんとおのゆにゆめたり  
夕月やかがりたとゆくやあせ。ゆくあれ  
玉さほりてよとく。玉猪西野たれどく。一見  
浦とあきてさんといとんとてげひつあたる再ち  
二見浦と。但る惣磨すと玉猪野の二見浦、天照  
大神御宿へ。面白とお感ありとく。うのて古事  
ちれど。二見浦と云から。玉猪首ハく一翁也  
あれとぞみとのとくふうおまくらく時あは國  
乃江のふとこ海乃川のやうりよおらかてゆをと

其處  
せ  
めにうつむてよしゆく  
かうあすか  
うよしとくそくをうそく  
ひれどく

左東坡集卷之三

紀乃あらは

朱雀院乃大藏本  
山中之山也

朱雀院を三条朱雀乃御いかなり。やはり宮門は  
院よりねえ。まへて。寛平法皇乃の事也。  
六十二代目乃  
朱雀院より

はくすひぬまよらあふとあゆみの紅葉乃納付のまふ  
はくすひばじめ翠のけづよいもぐりさかふめくわく

あへど。もゆる乃紅葉の神と云ふとぞひしをすたら  
とくらむかみ。万葉集に傳すとぞ。ほまがうも  
かくらむかみ。神事本草記とぞ。その間とまて  
まゆるかみあり

あひゆるかみ。たれもかきひくわせたるを  
芦の内ゆかみ。かくらむは世乃中にあひゆる

素性法師

まゆはうか神也。まゆの御事。神やうもん  
キもあはづかの神と切て。あくまくとくまく  
まゆの御事。一言あま。神やうもく経りんや  
まく出でゆのゆ。のゆにづかづかの神も。門を  
乃焉相うち。蘆衣たとへあり。並敷などよりあくま

ばく乃神もゆとゆ。深見。傍見乃着  
不。まゆ性入て。寂坐。一乃くとやくとそゆり  
けくより

古今和琴集卷第十

物名 陽樂の事あり

うくひと

萬葉抄 ゆき物也

花乃漏よりわちつうくひととれもあれば  
我心のあづみふわれそ。憂不干と。毛乃下くた  
と也。嘗とくせり。うやけりす。ぬきをとくと云  
者保津と。漏字也

ほくひと

花乃漏よりわちつうくひととれもあれば  
我心のあづみふわれそ。憂不干と。毛乃下くた  
と也。嘗とくせり。うやけりす。ぬきをとくと云  
者保津と。漏字也

うたさん

左系もけも

卷之三

大原初十  
流のうちをもれどもひろり神はまかんや  
とくふとも神よなまきよ

主生之矣

被りもまくまとまゆやこのうんじとうせんじ  
をあくわふむをつめ。ひれそきとうまんじ

清人不云

かうめよかくもくへんをかく  
穴豪周ふはのまやくもむぢてあひ  
ちりひめとせあみたう  
あめよおとせ。すれあめ

15

蒙古文

とくにまことのうねりもかみこむておりよ  
善乃身教をなす。豈も物ゆきもとじをもくらね  
ゆきおやうめん也  
からく乃もれ  
あうやぬ

中華書局影印  
卷之三

コトハジキとひてやりく。あらう物にねうすに  
とぢり

あらちもれ

をれくちきけ

芦引乃山からもまれ行きのやうりまの世ふとぞられ  
ゆくよみゆくもらむのとがくくよ。かくらむめぬせよ  
うあくじせらふとくとくとくとくあたとくじつり

をくらまの本

ともめり

みくらめ吉雲乃瀬ふうしわあうとうむ乃まかとくうん  
くう乃瀬ふうしわ。瀬とうむ乃まかとくうむ  
とく。とくの本とうすま後く。但一樣はあくへ  
らとくまかべとく本也。桂寺云

おくよたけとくまくわゆくまきうきて思ひの時ひのうを

うれ 狹衣云。若あくとやうとまうたを我られ  
やおりよれもひ乃行く風のよ

うれ教ぞとくゆゆ。モー一言と略ーとくふ  
やく。やくのをままたも行抱す。それも不審だり  
ズ吉雲乃おくふのくふ人よゆわく。桂寺云  
つまくあはれて。とくさゆふあとゆひこつーと  
ある物とく。とくも乃本とヤセとつひこ。又阿波  
毛乃ち民。背月の料よ。前とく一本ともヤセとく。  
又櫻。とくも乃本とく。あれをとくとく。或後は後哉  
波多津洋海

音あくと自氣よ拂う白も立とくま紀の花とくとくん  
然と拂まどりとくづり。又日午紀音裏乃寺とて

あへとくせみのうみよまむれひきうちもくらへはる  
拘きまふれまうされどうし。又まかた。又まかた。感事もよ  
交野乃きばほはくすあはりよとさり

やアラミの本

傍人不知

おもむねどやまくまく。食ふかくまん風のじさす  
姫のまくじやまくじのまくじ。風乃きまくじ。まくじ  
まくじ

あづひうほ

かくまくわひひまれよやまんとく。とおもむくまく  
くねあす日のまくまく。ゆく人をづく。ちく。や  
思ふでまくまく。只旦。とうく。野菜種たり。葛

フーわくど

人ゆへむちよあす。弓もくまく。我はくまく。あらひくまく  
人ゆとと。うりそ。う日のたすとと。宿と無くまく。  
ごくはくまく人のおりひきく。くまく。

くまく 僮正遍照

ちくまく。まくまく。まくまく。とおもむくまく。まくまく。まくまく  
おもむくまく。まくまく。まくまく。まくまく。まくまく。まくまく  
まくまく。まくまく。まくまく。まくまく。まくまく。まくまく。まくまく  
丹也。山也。水也。火也。木也。草也。まくまく。まくまく。まくまく  
とえ。源氏に。まくまく。まくまく。まくまく。まくまく。まくまく  
まくまく。まくまく。まくまく。まくまく。まくまく。まくまく。まくまく  
前也。一だくまく。まくまく。まくまく。まくまく。まくまく。まくまく  
牆葉と去

古文書  
卷之十

卷之三

卷之三

まよひきしきひよそアラムむ乃とあ、成物をうへりうらう  
る乃あと、とくもと初みゆたんあ、あ、あ、そのとつてま  
よひきしきひよそアラムむ乃とあ、成物をうへりうらう  
る乃あと、とくもと初みゆたんあ、あ、あ、そのとつてま

卷之三

蒙古文

向ふとよみくわ  
のうじゆう

かくのうをたまふと

朱雀院乃女即おあそびの所よもとと  
りふみそとくわくらふもととくわく

13

とくに立たれり。嘗てのよまん船とあらんをな紀  
小倉山よだちのくわくあれども、ゆき船とあら  
人うねとあらむとおもへるによあはせ

あくまくはれすりておとづれぬ地にむかひけり  
れぢの野をあらうて。やま乃をもとれ。まのまくもとれ。や  
くし。苦勞（さる）乃の心。桔梗（ききょう）ともとを去

卷之三

清人之書

ヨモトイシと古川乃高さんとミマフリ」と匂ひ乃もやく  
うほろひわらじ也。ありもつまハコモニミ泡の巣か寒  
よばかど乃うむれ尼不向よ。くありもへき勢りへくゆ  
ひす泡の巣とも。神からもへくねすもはなせり。又神と勝  
しもあらもうてともかはる。景もとみまはる花也。じと  
もとたぐり

つまうきんのまか ともより

我宿乃もかこよくとくろくのいよまれをやまみもるくふ  
そよぐたくもやすむじ野乃もだく我やどよくとく也  
於膳花也。忘一よ屋もよすづつよくもわとあくとま  
家ひき膳乃もやうす嘆くとおもれよまじ。よ以  
もれとづく

おもれ 漢人石翁

さとみくめむもそよぐに空琴乃世をとやく。や思ひなれ  
ありじよてたのむづく。づくもの世をとやく。こ思ひ  
をとく。無ことと

あふく

やくの名実 美田翁

すまにあくとやふ乃まとやじとくらあねうしおうと  
とく窓乃うしお。狂とやじとやじとやじとやじと  
ぞきこじゆく。うしお。牽牛<sup>ご</sup>子也。ちねとむとふとほり  
牽牛花ちね生也。槿花<sup>シク</sup>ハ故府<sup>ハシ</sup>よ。槿よまた白あり。一久  
日及とふ。字まよ槿<sup>シク</sup>ハ茶也。毛詩和列<sup>ハ</sup>。呼茶曰朝顔。  
是小。小もて日午乃俗槿<sup>シク</sup>茶。昔<sup>ハシ</sup>牽牛花と云。大なる  
信也。宋人诗云。槿花離下。后秋事。早有牽牛上寄

來げぬ乃ハ。槿躑躅と牽牛と各別也。牽牛花はうち  
扇風乃ト。田野人曰。牽牛花葉よりゆれど。びくとた  
あり。左の花。年々子、芳樟性喜蘭。秋に葉落。小人様をひ  
塾をタ。不育。亦うそと。要はひふ別々く。鄙小槿躑躅と  
生がまゆる。向うかたねどあやまつたり。源氏曰。朝歌、秋院よ。牽牛花乃ヒトトヨクわ叶ひ。故  
へ事也

二年在焉乃やどんすヤム時あわとお  
まうらをせりとムキセ行ひ

文苑英華

あらわすよあらわすよめども壁かづきありてたゞあらわすよ  
はくらむたゞや花のあらわすよひどるまげどとねり

たまはれとゆ。よりよ  
アモ。向去乃めどもまづりもあまきらとす。左  
之様の風事たりとひそほりお前。左  
やどりふちある。うるさく乃草木はけりふか  
あも。けり  
内裏昇家乃門院よ。む  
仙乃門。著といふ  
事と。着立の處よむとびて。やどりふけり  
て。うそてたゞ事也。又著門はけりとて。あ  
きてたゞたゞりとも云ふ或院

初喜乃ちつゆのう乃む。かくふくを  
きのとどく。教も。あめよ家おき。地経國は師。經住  
いよく。志がも。老江師。家極乃。作。懸原  
と。義。す。りて。ひ。と。浦。う。と。い。

かの記載をひづての承認す事もあらず。これ  
著乃事とぞとぞして。築館と棚と初子乃日  
十四五の女子れ。むす乃とくたまふらうとれど。うひと  
くく続編成耗もとくと。著旨は是にすかく。著旨とて  
さうせ。げか乃活く不角。れふらうとむし見  
こまくおき。著旨のまくらうたてとも。でまくらうと  
とももあり。世俗はやもまとよと。

あわふくと

紀のとくと

かくとくのよあじのやくと。ひもあへと。あそちを  
かくとくのよ見乃かげ。と。自かくと。かく花のちく  
ときり

やキ

平あつゆき

都ふくのまくと。やかくと。まくと。まくと。まくと。  
ほとくと。かくと。あくと。まくと。かくと。まくと。まくと。  
かくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。  
とと

かくと

傍人不知

ま釋かくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。  
うほとくと。のくと。まくと。まくと。まくと。まくと。  
をかくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。  
からまくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。

うれくと

あくやふ

うもむかと。まよけくと。まよけくと。まよけくと。  
うもむかと。まよけくと。まよけくと。まよけくと。  
うもむかと。まよけくと。まよけくと。まよけくと。

がまことせ。うらまくといひ。是より古今之種乃極事とつへ  
て。河はねひて言也。河葉草と云。すがれとも。もあつ  
て河骨と云物なりとせ。或流山川乃庭よ生る也。  
苔よと云。鳥羽也。秦始皇父莊襄王乃時。五人  
の鳥ある。毛羽の中にくらをゆき。あれど鳥羽毛と  
りく

さうじこけ

さうじこけとくも。もむ  
きのまちた。一さうりとくも。もくをあへそめも  
ものまち一かくりとくも。もくをあへそめも  
かく。さうりああい。まよまくた。苔也。日蔭乃うつと  
も云。神まつはむ。ハバけとくも。舞人神ま  
つとのうづく。又神ようぢうくとくも。とくも日

蔭乃ゑとて。まにうづく。あひてひじふ也。さう  
奥山の日蔭乃うづく。かきてたとづく。人よひと初え  
感流さうりああい。まよとくとくとくとくとくとくと  
まよ和ひ。あうとくとくとくとくとくとくとくとくと  
感云文選云。僻苔有毛丘葛。とりひ。あふまくも。も  
葛やうりとく。舞人神まつとくも。とくも

みくじけ

さあもも

金を落とあれむよ。これ物。ひらふたく壁。代虫  
病。金を落とす。のむ。く。それ。ひりく壁。べのま。乃  
く。くとく

かけのうれおやま

まよまでたうひあきゆく。冬を背はぐ。とあく。れぬ。若

廿九日  
さうしてたゞじ園行ふは月吹くと秋の山風と  
音吹くに筋力ゆきあひて間也。がん行はる草行  
すり。よろこびあひゆきうち

卷八

卷之三

はくまくらをとむと。されど、いと名付ひ  
きあり乃まくら。かくもとて、ぬるを紫と。幕やといは  
きをうかたうと也

まくはるはまくはる

おのゆめと

レタスめふ皆まつまかそひりあくせと人よアラえり  
からうかふと見まつてお日ハア。いじせとと人よア  
トモトモレ。レタスめを傳承乃の延。いきまつて花もども

芭蕉を採り力氣よ  
桔梗たくかねいきめうかりわせんとつ  
いざらふ里ひ物とたこの浦よとまくや  
いさみよしもとてつむせのよしよあ  
りまくこ卒尔とまくわゆいれ

たゞさうかく  
おまえさんやうにまつ  
あらばよなきことあらゆることわぬ物う  
こゑすまへよあひくよめと、とてぬねね、おぢこをく  
おまへこそとめづやそといつまをたまう

かくちとくのめまくまくのくにとく  
安泰をうけむる

安信清初稿

流れる水をあわせやあたまうん

春乃高ノよあくたまうれ。やうとれも乃、よまきう  
ことふきあうと。かくとハ海おのふれ石原也  
まの洞ハ双洞。支若壁去用ハ一越。於平洞冬ハ盤涉

洞なり

いとさむ

梅よあくの涙の香とまなれいとさむちむとひまん  
かちよつて涙乃まづくと春よもあまごいとせめり、  
花と見ばあくとまづくと。伊加く勝ち河内乃名を  
ざまにむ竹生島乃あすももとひづ

からそ見

あやほのゑ 阿保經見

かねくかいたくはよ落りまん浪浪流のこゝそりき  
ひきうら流も残るぬよ。わくよひづくとひづくと

仲裕

山乃高のうてぢりくうりみのまと風やたるく人  
水のまと風れをまう。たゞこのむれ冲くうじてぢりく  
ふと也

かみやうへ

はくゆき

うとむれの新くろくやうくらんかこの新よわらかく古  
後的新よふくらむる。ひとくわみのうりうてぞあらむ  
と。紙面川へにわらかきとハクヒ川ともむし。紙と  
瀬とくらむれをうり。平乃とくとくとある。かくた  
ふと見えず

トとくべ

昔ノ乃高のよれも白や乃はかくとくとくことだま

山をよ仕あれそりふせよとつまれもとはる乃う紀  
ときり

かみれ

すくみゆ

支那のうへまわる活少めゆくとむたむとむうこうう耶  
ナムの脣きふ活少乃行するまふたうてやす  
るだ我こうう也

かつゝ乃もや

源かととた忠

おくれを月のうへれやひたちひらと花とちくとそくと  
秋うきほどの実たま附されと月の極り實ひたまと  
とも乃あうにちくとそくとそくとせ月の極り事一通  
名苑云月中にうきほとよ挿本五たまと三百丈下に  
独の人あう樹とまつ是と挿男と云肉代云月、よ

桜あるふあゝと。櫻炭經云、簡淳提地、簡淳樹五一  
石波利實多。一名龍樹。さもと八万四千室。樹陰月中  
よ祖ざりうはりあうもとども。されど月の中比桜も  
よとなくす事也

百和名

後人不知

毛とふあうとちくと風なれひくとくこくへとくへ思  
花とのふふとあるどちくと風なれびいくとくねづ  
とねづふととく風とくとたうとくとくから。葉をま  
百和もい。五月みりふ。百和とくとくて合とくも也

すこやく

ああも

まくとくのうへかくじらたりせひ松くらんハ袖くらんほ  
裏乃中にあはうしがおくとくらんほ

かくいはひ乃とく。ゆく。うら。かく。里  
の。ゆの。いと。波。あ。海。と。い。お。  
か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。  
か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。

卷之三

卷之三

蒙古文書

す。されどまかづかぬ瀬川おもひへんや底にまよひむ  
あぐれぬまくみえぬたう川を。仲乃よきこゆひ  
ぞ。底もよきこゆひ。中河ともいづくらる事。ひ  
わくよひつらむとゆふちあく。やなだり。河とも仲乃と  
より

さくらのまつりにあつたかのうのゆめ  
おもひでるよみうらのまつり

蒙古人丸號。蒙古人丸號。蒙古人丸號。

たまへとあつ

おもむくあやうくゆきとおちりふちりぬへとおふ  
國よあくやとてふのやとわゆきばんそすととふおちり  
ゆき

